**シナリオナンバー**

2-1から2-6までが中の下、2-12までが中の中、2-13からが中の上

1-1「学者の落しもの」

1-2「家宝の剣」

1-3「料理のレシピ」

2-1「狼男」

2-2「恋文」

2-3「チェンジリング」

2-4「通り魔」

2-5「無人教室」

2-6「笑わない数学者」

2-7「毒殺」

2-8「エーシーズ・ハイ」

2-9「伝説の薬剤師」

2-10「10年目の浮気？」

2-11「届かなかった贈り物」

2-12「消えたネクタイ」

2-13「幽霊屋敷」

2-14「くさきものども」

2-15「紫の薔薇」

2-16「少年の一目惚れ」

2-17「盗まれた首飾りを取り戻して」

2-18「行方不明の看板娘」

3-1「表紙のない本」

3-2「読めない手紙」

3-3「謎の襲撃者」

**１－１「学者の落としもの」**

概要　路地裏で時計を落とした学者。路地裏に詳しい靴磨きに聞いてみることに。

依頼人　学者

昨日、路地裏で時計を落としてしまった。靴磨きなら路地裏によく出入りしてるみたいだし、話を聞いてきてもらえないか？

・初期証拠カード「落とした時計」に対して

靴磨き　「それならこの時計ですかね。さすがに、拾ったものを売るなんてしないですよ」

**アイテムカード　「学者のものらしき時計」を渡してください。**

その他　「路地裏のことなら靴磨きが知っている。彼に聞くといいよ」

・アイテムカード「学者のものらしき時計」に対して

学者　「おお、この時計だ。ありがとう」

**真相カード　「見つかった時計」を渡してください。**

その他　「早く学者さんに届けてあげな」

**１－２「家宝の剣」**

概要　10年前に手放した家宝の剣を探して欲しい、2年前に新聞で見たと言われて探すと、それは商人が持っていた。

依頼人　レイモンド・ベイリー

我が一族には代々伝わる家宝の剣があったのだが、10年前にとある事情で手放さざるを得なくなった。今それを買い戻したいのだが、どこにあるのかわからない。どうか現在の所有者を探してほしい。自分で調べた結果では、2年ほど前にどこかの新聞で見たという話を聞いた。

・初期証拠カード「家宝の剣」に対して

記者「2年前ですか……でしたら多分、私のところで刀剣関係の特集を組んだ時のことですね。あれは商人さんに頼んで貸してもらったものだったと思います」

**証拠カード「商人に借りた」を渡して下さい。**

商人「ああ、それなら私が持っているよ。そういう事情なら売却を拒むつもりもないし。もちろん、それ相応の対価は払っていただくつもりだが」

**真相カード「剣は商人が」を渡して下さい**。

他「以前に新聞で見たというなら、記者に聞いてみるといいんじゃないかな」

・証拠カード「商人に借りた」に対して

商人……上と同じ。

他「商人に聞いてみるべきだろう」

**１－３「料理のレシピ」**

概要　貴族が作った料理のレシピをマスター（あるいは商人）に訂正させる。

依頼人　貴族

はやりの料理を自分だけで作ろうとしたが、おいしく作れない。どうやらレシピに誤りがあるようだ。自分が直接聞きに行くのは悔しいので、代わりに調べてきてほしい。

・初期証拠カード　「自作レシピ」に対して

マスター「この料理はつくるのが難しいんだ。特別な材料がいるからね。はい、これが正しいレシピだ。意地っ張りな貴族様に持っていってやるといい。」

**証拠カード　「プロのレシピと材料」を渡してください。**

商人「ふうん。その料理についてなら私も聞いたことがある。この珍しい香辛料を貴族様に持っていくといい。後は自分でやるだろう。まあこういう話なら本当は、バーのマスターが一番詳しいんだけどね」

**証拠カード　「足りなかった材料」を渡してください。**

貴族「依頼の通りだ、よろしく頼む。」

他「バーのマスターに聞きに行ったら？」

・「プロのレシピと材料」に対して

貴族「なるほど、これが正しいレシピか。ありがとう」

他「貴族様の所に行って確かめるといい」

・「足りなかった材料」に対して

貴族「なるほど、足りなかったのはこれか。ありがとう、自分で試してみるよ」

他「貴族様の所に行って確かめるといい」

**いずれの場合も、真相カード　「流行りの料理」を渡してください。**

**２－１　狼男**

概要　町に流れる狼男のうわさは、新聞記者のでっち上げだった。

依頼人　幼稚園の園長

満月の夜に狼男が出るという噂が立っている。疑わしいが、新聞で取り上げられるほどで、子供たちは怖がっている。真相を確かめてほしい。

・初期ハンドアウト「狼男のうわさ」に対して

記者「すごいでしょ、私が狼男の記事書いたんですよ。おかげで新聞もバカ売れで。正体は何かって？いやいや、狼は本当にいるんですよー？」（明らかに怪しく）

貴族「ロマンチックな噂だが、私はよく知らないね。他のものに聞いてみるといい」

学者「ばかばかしい。何か見ていそうな人間に話を聞くんだな」

マスター「俺は夜、店にいるもんでね、噂しか知らないんだ。すまん」

靴磨き「狼男？ああ、そういえばこの前の満月の夜、銀色の毛の子犬を頭の上に乗せてる怪しいやつがいたな。遠くから見たら狼男に見えたかもしれないが、俺の目はごまかせねえよ。

**証拠カード「目撃情報」を渡す**

商人「ああ、あの記者さんの記事ですよね。新聞がよく売れたようで、この前買っていただいた珍種の銀色の子犬の代金を払いに来られました。しかし変ですね、彼は犬嫌いだったはずなのですが……」

**証拠カード「銀色の子犬」を渡す**

・「目撃情報」に対して

記者「へーっそうですか、変な人もいたものですね。私じゃないですよ！証拠がないじゃないですか」

他（商人は上と同じ）「そ－なのかー」

・「銀色の子犬」に対して

記者「え、ええ、最近犬派になりまして。実際稼げましたしね。いいえ、こっちの話ですよ……」

他（靴磨きは上と同じ）「そーなのかー」

・証拠カード「目撃情報」「銀色の子犬」に対して

記者「うっ…わかりましたよ。ほんとのことを言います。記事がそれっぽくなるように変装して歩いたんです」

**真相カード「でっち上げ」を渡す**

他「なら、記者に直接聞いてみればいいのでは？」

**２－２「恋文」**

概要　マスターが悪ふざけで書いた恋文を貴族が真に受けちゃったのさ！

依頼人　貴族

カバンの整理をしていたら、まるで身に覚えのない恋文を発見してしまった。差出人はフィアーナという女性で、身分違いの愛を告白する内容だったが、私はこの女性に心当たりはない。とはいえ無視するわけにもいかないので、送り主を探してほしい。

・初期証拠カード「恋文」に対して

商人「あはは、あれはあんなことになってたのか！……いや済まない。悪いが、私の口からあまり詳しいことを説明するわけにはいかないなあ」

学者「差出人の名前はギリシア人の女性によくある名前だね、関係があるかは知らないが」

記者「コレと同じ内容の恋文が出てくる小説を以前マスターに読ませてもらったことがあるね。たしか身分違いの恋をテーマにした作品だった気がするよ」

**証拠カード「恋文の出てくる小説」を渡して下さい。**

マスター「何も知らないぞ(焦りつつ)」

貴族「何か進展はあったか？」

靴磨き「知りませんね」

・証拠カード「恋文の出てくる小説」について

商人「そこまで知っているなら教えてあげますが、実はラブレターを書いたのはマスターなんですよ。詳しいことは書いた本人に聞いてみな」

**証拠カード「マスターの冗談」を渡して下さい。**

マスター「確かに前にそんな小説を読んだが、なにか？(焦りながら)」

貴族「その小説は……以前マスターや商人と読んだ時に、マスターが持ってきてたような……あれは何時の事だったかなあ？」

靴磨き「そういやこの前酔っ払いどもがその小説について話してるのを聞いたなあ。確かあれは商人とマスターだったかな？」

他「私に言われましても……」

・証拠カード「マスターの冗談」について

マスター「全く、商人には口止めをしておいたのに……そうです私があの恋文を書き、貴族さんに渡しましたが酒の席だったのでまさか真に受けるとは思わなかったのです。貴族さんに謝っといてもらえますか」

**真相カード「酒の席の冗談」を渡して下さい。**

貴族「そうだったのか、しかし何故そんなことをしたのか気になるな」←マスターに誘導して下さい。

他「そこまでわかってるなら、マスターに行け」

**２－３「チェンジリング」**

概要　舞台女優のカバンと入れ替わっていたのさ！

依頼人　町人

私のカバンが、よく似た他人のカバンと入れ替わってしまった。なかにはいくつかの小物と読めない言語で書かれた本が入っている。自分も困っているが、きっと相手も困っているだろう。このカバンの持ち主を見つけ出して、交換し直してはくれないだろうか？

・初期証拠カード「読めない本」について

学者「おそらくラテン語だね、読める部分を訳してみたが何かの演劇の台本のようだ。記者が新聞に劇の特集記事を載せていたからなにか知っているかもしれないね」

**証拠カード「一部訳の台本」を渡して下さい。**

他「読めないから判断のしようがないね……学者さんなら読めるかもしれないが」←学者に誘導して下さい。

・証拠カード「一部訳の台本」について

記者「ああこれならこの前取材したオペラの台本で間違い無いだろうね。持ち主？確か貴族さんの父親がオペラのスポンサーをしていたから話を聞いてみればいいんじゃないかな」

**証拠カード「スポンサー」を渡して下さい。**

貴族「オペラなら父上が熱を上げていたようだが詳しいことまではわからないな」

他「劇？それなら記者さんが特集記事を書いていたような……」←記者への誘導をお願いします。

・証拠カード「スポンサー」について

貴族「そうか、それなら父親に渡してもらうように言っておくよ」

**真相カード「あるべきところへ」を渡して下さい。**

他「貴族さんの所へ行ったほうがいいのでは……」←貴族への誘導をお願いします。

**２－４「通り魔」**

概要　ある晩、貴族が何者かに殴られた。その時は怖くなり逃げだしたが、数日たつとなぐられた怒りがわいてきた。警察に相談するも殴られたという証拠がないので相手にされない。

依頼人　貴族

数日前の晩、路地裏で何者かに殴られた。犯人を突き止めてほしい。

・初期証拠カード「いきなりの襲撃」に対して

貴族「依頼の通りだ。よろしく頼むぞ。（詳しい事件の内容を聞かれて）それを調べるのが君の仕事ではないのかね？まあいいだろう。数日前の晩、酔っていた時にいきなり殴られてね。その時は怖くなり逃げだしたが、数日たつとなぐられた怒りがわいてきた。警察に相談するも殴られたという証拠がないので相手にされない。大方私を恨む奴だろう。調べてくれたまえ」

他「殴られた事件は知らない」と答える

靴磨き「事件は知らんが、貴族に新しくガールフレンドができた、トラブルが起きるなら彼女がらみだろう。彼女は商人の娘だ。」

**証言カード「ガールフレンド」を渡してください。**

・証言カード「ガールフレンド」に対して

商人「私の娘は貴族からストーカー被害にあっており、悪いとわかっていましたが、娘を守るために彼を殴りました」

**証言カード「ストーカー」を渡してください。**

貴族「ぎくっ。まあいい、調査を続けたまえ」

その他「そうなのか。なら商人に聞いてみればいいのでは？」

・証言カード「ストーカー」に対して

貴族　「この依頼は解決したということにしておくからストーカーのことは黙っていてくれ」

**真相カード「依頼の取り下げ」を渡してください。**

他「そうなのか。なら貴族に聞いてみればいいのでは？」

**２－５「無人教室」**

概要　学者先生から、子供たちが子供教室に来ないと言われる。その真相は漫画を読んでいたのだった！

依頼人　学者

子供たち相手に学習塾を開いているのだが、どういうわけか最近、生徒たちが一人もやってこない。親たちに聞いても、子供はちゃんと行っているというし……どういうことなのか調べてほしい。

・初期証拠カード「子供が来ない」に対して

靴磨き　「そういえば最近、子供たちが「竜の玉」がどうとか話しているな。

　　　　　なんのことだかはわからんが、流行っているものではあるらしい。」

**証拠カード　「竜の玉」を渡してください。**

商人・マスター「うちの子供は、ちゃんと子供教室にいっているというのだが・・・」

他　　「学者先生の教室ねえ・・・たしか路地を少し行ったところにあったなぁ・・・」

（貴族は多少動揺した後に、台詞を出してください）

・証拠カード「竜の玉」に対して

新聞記者　「それは・・東方から伝わってる「MANGA」と呼ばれる絵巻物の一つのハズだ・・・。

　　　　　　たしか貴族様が熱心な収集家だったような・・・」

**証拠カード「貴族の所有物」を渡してください。**

貴族　　　「な、なんのことだろうか・・・？」明らかに動揺してください。

他　　　　「竜の玉・・・？なんのことだろうかはわからないけど・・・流行ものなら

　　　　　　新聞記者に聞くのが手っ取り早いんじゃないか？」

・証拠カード　「貴族の所有物」に対して

貴族　　「あぁ・・・確かに私は持っているが・・・。それがどうかしたか・・・？」

他　　　「へぇ・・・貴族様は趣味が本当に広いんだなぁ…。

　　　　　あれ？でもなんで子供たちの間で流行っているのだろうか・・・？」

・証拠カード　「子供が来ない」「貴族の所有物」に対して

貴族「……ああ、その通りさ。子供は私の家でMANGAを読んでいるよ。あんな小さいのに、面白くもない勉強なんてかわいそうじゃないか……。息抜きをさせたかったんだ……。学者の方には私の方から謝っておくよ……」

**真相カード　「貴族の家で」を渡してください。**

他　　　　「うーん・・・われわれには推測するしかできないからなぁ・・・

　　　　　　直接貴族様に聞くのがいいのではないだろうか？」

**２－６「笑わない数学者」**

概要　学者の原稿が消えた。息子の紙ヒコーキになっていた。

依頼人　学者

昨晩帰宅すると私の書斎から原稿の下書きが消えていた。家族に聞いたが他に盗られたものはないらしい、一体どういうことなのか調べてほしい。

・初期証拠カード「消えた原稿」に対して

学者「原稿に金銭価値など無いしわざわざ盗むようなものとは思えない」

靴磨き「原稿は知らないが路地裏に紙くずがいっぱい落ちているからそこに紛れているかもな」

商人「原稿かどうかは確認してないけど昨日学者さんとこのお子さんが酒場の方に紙束持って遊びに行くのは見たよ」

**証拠カード「紙束を抱えた息子」を渡して下さい。**

他「風で飛んだんじゃないか？」←巡回させれば手がかりは出るので他のNPCに話を聞きに行くよう伝えて下さい。

・証拠カード「紙束を抱えた息子」に関して

記者「最近子供たちの間で飛行機遊びが流行っているようだね」

マスター「この前子供たちに飛行機の折り方を教えていたんだが学者のとこの息子が小難しい数式が書かれた紙を持ってきたな、その時の紙飛行機ならここにあるから持って行っていいぞ」

**証拠カード「数式の書かれた飛行機」を渡して下さい。**

・証拠カード「数式の書かれた紙飛行機」に関して

学者「原稿を持ちだしたのは息子だったのですね、お手数おかけしました」

**真相カード「犯人は息子」を渡して下さい。**

他「学者さんに教えてあげたほうがいいんじゃないのか？」←学者への誘導をお願いします。

**２－７「毒殺」**

概要

アンダーソン氏が毒殺された。容疑者のボストン氏が残した決定的な証拠（毒の入っていた万年筆型注射器）を探し出して、彼を犯人と特定する。

ハンドアウト

依頼：警察　先日、銀行家のアンダーソン氏が毒殺された。毒は、遺体に残った小さな針で刺されたような跡から入ったと思われる。容疑者は商売敵のボストン氏に絞られている。しかし、証拠が十分でなく、逮捕に踏み切れないでいる。決定的な証拠を見つけ出してほしい。

・初期証拠カード「アンダーソン氏の死」に対して

靴磨き　「いやあ、特に知っていることはありませんね」

商人　　「ボストン氏ですか？事件の少し前に、私の店で変わったものを買いました。とある医者が遊びで作らせた一品物の注射器で、一見ただの万年筆なのですが、注射器が仕込まれてましてね。彼は医者でもありませんし、コレクターでもないのに、何に使うつもりなんでしょうかね？」

**証拠カード「ボストン氏の買い物」を渡して下さい。**

貴族　　「ああ、あの二人か。仲が悪いとは聞いていたが、まさかあんなことになるとは……いや、まだ犯人と決まったわけではなかったな。忘れてくれ」

マスター「ボストン氏は、商人さんの店のお得意様らしいね」

記者　　「あの事件ですか。特に情報は掴んでませんねえ」

学者　　「あの事件か。なかなか興味深い毒を使ったようだね。なに、私は毒には少々詳しいのでね。警察から相談を受けたこともあるほどだよ。何か調べて欲しいものがあれば言ってくれたまえ」

・証拠カード「ボストン氏の買い物」に対して

靴磨き　「ああ、それはこの前拾った万年筆じゃないかと。ほら、これですよ。目立たないところに落ちていたのを、変わった品物だと思って拾ったんですが、落とし主は現れないし、売ろうにも珍しいものだったのでどこも買ってくれなくてね」

**アイテムカード「落ちていた万年筆」を渡して下さい。**

商人　　「あれ以上のことは何も知りませんよ」

残り　　「まあ、たしかに変な話だね。そう言えば、この前靴磨きが変なものを拾ったとか言っていたな」

・証拠カード「落ちていた万年筆」に対して

学者　　「ふむ……この中の注射器には、毒が入っていた痕跡があるね。しかもこれは犯行に使われたのと同じ毒だ」

**真相カード「決定的証拠」を渡して下さい。**

商人　　「ああ、これは間違いなくボストン氏が買っていったものですね」

その他　学者ならたぶんそこに毒が入っていないか確かめてくれるだろう。

**２－８「エーシーズ・ハイ」**

概要 あの日、助けてくれたのは、貴族だったのさ。彼はその日仮病を装って面倒なパーティーをサボった手前、正直に名乗りでるわけにもいかなかったのだが、ばっちり目撃されてたので観念して自白した。

依頼主　とある飛行機乗り

　ある日飛行機に乗ってたところ、急な豪雨で方向を見失ってしまった。墜落も覚悟した時、一機の飛行機が目の前に現れ、その飛行機の後ろについていった私は飛行場までなんとかたどり着くことができた。私を助けてくれたあの飛行機乗りは誰だったのか？お礼がしたいのでパイロットを探してきてくれ。唯一の手がかりは機体にあった7つの傷だ。

・初期証拠カード「キズモノ飛行機」に対して

新聞記者「それってもしかして貴族様のではないですか？まえに飛行機関連の取材で

見せてもらったことがあるのですが、それと同じ機体に思えます」

**証拠カード「貴族説」を渡して下さい。**

貴族「さあ、わからないな。傷のある飛行機なんてそこまで珍しいものではないから」

他「うーん……飛行機と言えば貴族様が好きでしたね。かなりの腕らしいですよ。それと、記者は飛行機関係の記事もたまに書いてるみたいですね」

・証拠カード「貴族説」に対して

貴族「言われてみれば、私の飛行機に似ているな。でも、私じゃないよ。あの日は酷い風邪を引いてしまってね。一日中家で寝込んでたさ。おかげで大事なパーティーに出損ねた位だよ」

**証言カード「あの日は病気」を渡して下さい。**

他「まずは貴族に話を聞くべきでは？」

・証拠カード　「あの日は病気」に対して

貴族「まあそういう訳だから、他の人に当たってくれたまえ」

靴磨き「あれ、おかしいなあ。俺はあの日貴族様を外で見たんですが。ちょっとわかりにくい服装でしたが間違いありません。とても健康そうに見えましたよ」

**証拠カード「目撃証言」を渡して下さい。**

マスター「あのパーティーか。そういえば堅苦しくて面倒だから出たくないってぼやいてたなあ。ひょっとすると仮病かもしれんぞ」

記者「おかしいですねえ？間違い無いと思ったんですが」

その他「貴族様が違うとなると、心当たりはありませんね」

・証拠カード「目撃証言」に対して

貴族「しまったなあ。知り合いに見られてたとは。一応軽く変装はしたつもりだったんだが……まあ仕方ない。そう、あれは俺だよ。あの日は堅苦しくて面倒なパーティーに出たくなかったから仮病を使ったんだ」

**真相カード「正体は貴族」を渡して下さい。**

**２－９「伝説の薬剤師」**

概要　伝説の薬剤師は、学者と思いきや実は靴磨き。星のあざを頼りに探すことになるの。

依頼人　町人

娘がひどい病気にかかってしまい、医者に見せてもお手上げだと言われてしまった。だがしかし、この町にいると言われる伝説の薬剤師ならば娘を治してくれるかもしれない。伝説の薬剤師を探し出してほしい。

・初期証拠カード　「伝説の薬剤師」

記者「伝説の薬剤師ですか・・・。たしか、特徴的な星形のあざがあるという噂が。」

**証拠カード「星の形をしたアザ」を渡してください**。

マスター「薬ねえ。靴磨きは何故だか薬には詳しいみたいだ。前に店で飲み過ぎて死にそうな顔してた客がいてな。そいつに靴磨きが何かの薬を飲ませてやったら、急にそいつの顔色が良くなってな」

**証拠カード「靴磨きの薬」を渡してください。**

靴磨き「私のような・・しがない靴磨きが、伝説の靴磨きなわけがないでしょう・・？」

他　「うーん。たしか伝説の無免許薬剤師、って噂だね。詳しいことは・・まぁ、噂なら

　　　記者さんに聞いてみればいいんじゃないかな？」

学者「あいにく・・私ではないよ。医学も多少なら心得はあるが、そこまでの腕ではないし」

・「星の形をしたアザ」に対して

学者「ああ、確か前に靴磨きがアザを消したいとかいってきたなぁ。たしか星形のアザだったんで、珍しいと思ったもんだ」

**証拠カード「星のアザの持ち主」を渡してください。**

マスター「あぁ・・・そういえば、靴磨きのあざの形は特徴的だった気がするなぁ・・・」

靴磨き「私にもアザはありますが・・・星形なんてアザは持ってはいませんよ」

他　　「アザですか・・？それも星形の・・・？わかんないですねぇ。」

・「星のアザの持ち主」に対して

靴磨き「学者先生に聞いたのは、目立つうえに不気味なモノでしたから・・特に意味はありませんよ。」

他「へぇ・・・そうなのかい？星のアザとは変わってるねぇ。でも、消そうとするほどの理由じゃないね？」

・「靴磨きの薬」に対して

靴磨き「まあそういうことはありましたが……あれは貰い物ですよ」

記者「直接関係あるかはわかりませんけど・・。靴磨きさんって、意外と博識で、路地裏の浮浪者さんには健康面とかお世話になっている人はおおいみたいですよ？」

他　「ふーん、そんなことがあったのか」

・「路地裏の治療者」「星のアザの持ち主」に対して

靴磨き「やれやれ・・・そこまで調べはついているんですか。昔の話ですよ。今はもうただ静かに暮らしたいだけで・・面倒事はこりごりですのに・・。まぁ、一度だけならよいでしょう・・」

**真相カード「伝説の薬剤師」を渡してください。**

他「・・・うーん。靴磨きさんに直接聞いてみたらいかがでしょうか？」

**２－１０「10年目の浮気？」**

概要　結婚十周年を目前にして、最近の夫の行動を不審に思った奥さんから浮気調査の依頼が来た。しかし夫は結婚記念日のための贈り物を作って貰おうと、引退した職人の家を探しまわっていたのだった。

依頼主　アニー・ハーカー

夫であるトマス・ハーカーの素行調査を依頼します。これまで夫は仕事以外には、趣味のカードをやりに酒場に行くぐらいくらいしか外出することはなかったのですが、最近仕事でもないのに、頻繁に外出するようになりました。結婚してからもうすぐ10年になりますが、こんなことは初めてで、もしかしたら浮気ではないかと思うと不安でたまりません。どうかよろしくお願いします。

・初期証拠カード「トマスの浮気疑惑」について

マスター「トマスか。しばらく来てないな。しかし浮気ねえ……あいつがそんなことするとも思えんが。この前会った時は、結婚記念日に妻に贈るものについて相談されたくらいだし。途中で何やら思いついた様に見えたが、何を思いついたかは教えてくれなかったな」

**証拠カード「最近会ってない」を渡して下さい。**

商人「トマスか。そう言えばちょっと前に、彼にある指輪職人の居場所を聞かれたな。その職人は10年前にハーカー夫妻の結婚指輪を作った職人で、私とも付き合いがあったんだ。もっとも何年か前に引退してしまって、現在の消息はわからないんだが」

**証拠カード「引退した指輪職人」を渡して下さい。**

・証拠カード「引退した指輪職人」について

記者「それなら知ってます。たまたまかどうかは知りませんが、近所に住んでますので。ただ、偏屈な老人で、昔馴染の人としかろくに話をしないみたいで……彼と話がしたければ、商人に仲介を頼むべきでしょうね」

**証拠カード「職人の今」を渡して下さい。**

その他「あの老人ですか……確か実家が記者の家の近くだったので、そっちに帰ったのかもしれません」

・証拠カード「職人の今」について

商人「なるほど、ちょっと待ってくれたまえ……（間）……彼に話を聞いたところ、トマスがつい先日彼の家を訪れて、結婚十周年の記念の品の制作を依頼してきたらしい。散々探し回ったらしく、ひどく疲れた様子だったとか。普通なら引き受けないが、その様子を見て特別に引き受けることにしたと言っていたよ。奥さんに黙っていたのは、記念日当日に驚かせたかったからだそうだ」

**真相カード「結婚十周年の記念品」を渡して下さい。**

その他「商人に頼んで下さい」

**２－１１「届かなかった贈り物」**

概要　たらいまわし。それだけ。ざまぁｗｗｗ。

依頼人　貴族

　芸術家の友人が、私にプレゼントを送ったらしいのだが、宅配業者の手違いで途中で紛失してしまった。中身はわからないが、紅白の箱で送られたことは確かだ。是非探し出して持ってきてほしい。

・初期証拠カード「紅白の箱」に対して

　靴磨き「あ・・あれか？拾ったんだよ。中身は女神像だったんだ・・・え？商人に売っちまったよ。」

**証拠カード「女神像」をわたしてください。**

　貴族　「是非見つけ出してくれたまえ。」

　他　　「紅白の箱？いや、知らないが・・・。」

・証拠カード「中身は女神像」に対して

　商人「え？女神像？ああ。アレなら数日前に学者様が買っていきましたよ。なんでも、

　　　　ヴィーナスとかいうのがあの像の名前らしいですね。」

**証拠カード「ヴィーナス像」を渡してください。**

　貴族「へえ。中身は女神像だったのか。探してきてくれたまえ！！」

他「女神像か・・・。それは見ていないな。」

・証拠カード「ヴィーナス像」に対して

　学者「え？ヴィーナス像かい？ああ。それなら、新聞記者にあげてしまったよ。

　　　　もっとも彼は、私の訂正に関わらず、最後まで裸の像としか呼んでなかったが。」

**証拠カード「裸体像」を渡してください。**

　貴族「ほう。ヴィーナス像？どんなものだろうか？楽しみだ。」

　他「ヴィーナス像？いや、そんなものは見ていないが・・・」

・証拠カード「裸体像」に対して。

　新聞記者「ああ、裸の像？あったねぇ。正式名称はなんだったかなぁ？でもね、酒場のマスターにみつかっちまって、借金のカタにとられちゃったんだ。悪いね。」

**証拠カード「ツケのカタ」を渡してください。**

貴族「裸体像か・・・？ダビデとかかねぇ。」

　他「裸体像・・・？そんなものはしらないなぁ。」

・証拠カード「ツケのカタ」に対して

　マスター「ああ。あったねぇ。いや、貴族様との賭けに使って、すぐ手放すことになっちゃったから、どんなもんだったかは覚えてないんだけどね。貴族様が持ってるはずだよ」

**証拠カード「ギャンブルのベット」を渡してください。**

　貴族「酒場のツケに人のものを使うなよ、ってねぇ・・・？」

　他　「いや・・酒場のツケが私たちにどう関係あるんで？」

・証拠カード「ギャンブルのベット」に対して

貴族「ウッソ・・・！あれだったのか！！いやあ、スマンスマンまさか手元に戻って来るとは！！いやー本当にご苦労だったな！！アッハッハ」

**真相カード「数奇な運命」を渡してください。**

　他　「ああ。マスターと貴族さんはよくギャンブルしてるからね。」

**２－１２「消えたネクタイ」**

概要　ネクタイを誰に貸したか？記者は商人に貸したが、商人の店の店員が、仕入れの品と勘違いして、学者先生へと売ってしまっていたのだった。

依頼主　記者

最近、ネクタイを商人へ貸したのだが、いつになっても帰ってこない。忙しくて時間が取れないので、代わりにネクタイを取り戻してほしい。

・初期証拠カード「ネクタイは商人のもとへ」に対して

商人「そんな話もしたが、実際に私は借りてはいない。別の人と勘違いしたのではないだろうか？」

学者「記者？私は記者に特に借りているものはないよ？」

マスター「そういえば。記者さんが前につけていたネクタイと同じものを最近学者さんがつけているな。何か関係があるのではないかな？」

**証拠カード「マスターの証言」を渡してください。**

他「うーん・・商人さんとはよく会うが変わった様子はないなぁ。よく顔を合わせているマスターなら何か知っているんじゃないか？」

・証拠カード「マスターの証言」に対して

学者「うん・・・？このネクタイは私が商人のところでかったものだが？領収書だってある。気になるなら記者のところへ持って行ってもかまわないが？」

**アイテムカード「ネクタイと領収書」を渡してください。**

記者「おかしいな・・学者さんに貸した覚えなんてないのだけれど。」

他「へえ。なるほど。・・それが私に関係あるとは思えないのだが？」

・アイテムカード「ネクタイと領収書」に対して

記者「間違いない。これは私のネクタイだ。しかし、何故学者先生が持っているのだろうか・・？おかしいな？商人さんに送ったと思ったのに。」

**証拠カード「郵便の行方？」を渡してください。**

商人「これは確かにうちの店の領収書だね。サインだってうちの店員のものだ。

　　　あいにくと私はこのネクタイ自体に見覚えはないが。」

他「特に何もわからないなぁ・・・？」

・証拠カード「郵便の行方？」に対して

商人「なに？ネクタイを記者が私に送った？しかし、私の手元にはなにも届いてはいないぞ？送ったならなぜ、私の手元には何もないのかね？」

学者「いや、私のもとには何も来てないぞ？このネクタイは直接店へ行って買ったものだし。」

他　「記者からの郵便？いや、私のところには来ていないよ。」

・証拠カード「ネクタイと領収証」「郵便の行方」に対して

商人「ちょっとまってくれ・・・。（間をおいて）・・・どうやら従業員が、仕入れの品と間違えって売ってしまったようだ。あとは私がやっておくよ。」

**真相カード「手違い」を渡してください。**

他　「特に何もわからないなぁ・・・？」

**２－１３「幽霊屋敷」**

概要　幽霊屋敷だと思ったら、子供たちがひっそりと猫飼ってるだけだった。どっちにしろ買い手つかなそうではある。

依頼主　ジム・バートン

私が取り扱っている物件に悪霊が出ると噂になっているものがある、このままでは買い手がつかなくなってしまうので噂の真相を探って欲しい。

・初期証拠カード「悪霊の噂」について

商人「その噂なら聞いたことがあるよ。うちの子供はお菓子を持って友達とちょくちょく近くまで行っているみたいだね、肝試し気分なんだろうさ」

学者「悪霊なんて非科学的だね」

主人「あの屋敷な、依頼主がこの前「良い物件が破格値で買えた」と酔っ払いながら言いふらしていたが悪霊が出るなんて噂流されちゃ値段下げないと買い手もつかないだろうよ」

貴族「あの屋敷は私の知人の持ち家だったのだがどうも小賢しい依頼主に二束三文で買い叩かれたらしい。売却の件は記者ぐらいなら知っているだろう、私が話すことではない」

**証拠カード「買い叩き」を渡して下さい。**

記者「なんでも夜中になるとだれも住んでないのに物音がするらしい。学者さんなら“科学的見解”ってやつを教えてくれるんじゃないか？」

**証拠カード「夜中の物音」を渡して下さい。**

靴磨き「噂は聞いたことがありますが詳しいことは知らないですね」

・証拠カード「買い叩き」について

記者「元の持ち主さんの事か、急ぎで金が必要だったらしいし安値でも売り飛ばすしかなかったんだろうよ。依頼主を恨んでいるかって？彼は屋敷の一つや二つ安値で売り飛ばしたぐらいで気にするような人間じゃないよ、むしろ早く資金が集まったと喜んでいるんじゃないか」

**証拠カード「円満な取引」を渡して下さい。**

他「詳しいことは知らないな、記者ならそういうことに詳しいんじゃないか」←事情通の記者に誘導するような発言をお願いします。

・証拠カード「円満な取引」について

全員「円満な取引ならそれでいいじゃないか」

（これ以上この手がかりからは情報が手にはいらないことを伝えて下さい）

・証拠カード「夜中の物音」について

学者「幽霊なんて要る訳が無いだろう。夜中に物音がするのであれば誰かが夜中に屋敷内をうろついているだけの話、子供が肝試し気分で遊んでいるんじゃないのか？」

**証拠カード「暗闇の中で子供」を渡して下さい。**

他「誰も居ないのに物音がするなんてなんだか薄気味悪いな」←次に話を聞くNPCを言っているので誘導はなくて良いと思います。

・証拠カード「暗闇の中で子供」について

商人「うちの子が毎日のように屋敷の方へ遊びに行くので不思議に思って問いただしたらあのお屋敷に忍び込んで捨て猫を飼っているんだとさ。なんでも毎日会いにいかないと夜中寂しくて屋敷内を爪でひっかきまわすらしい」

**真相カード「子供たちが屋敷で飼う猫」を渡してください**。

他「ちょっとわからないな、商人さんのところは確か子供が居たはずだから詳しいことを知っているかもしれないね」←商人への誘導をお願いします。

**２－１４「くさきものども」**

概要　商店街の裏路地で、謎の集団が集まっていた！それらが去った後残されたのは名状しがたき異臭のみ！貴族様からの依頼を受けて、マスターが納豆を使った新メニュー作ってたなんてとても言えない！！

依頼主　商店街の近所の住人

最近、商店街の裏路地に怪しげな集団が現れ、彼らが去った後には謎の異臭が残されている。どうにも不気味なので調査してほしい。

・初期証拠カード　「謎の集団」について

記者「あぁ、最近噂になってますよ。なんでも腐ってしまった豆を食べる集団がいるとか……。相当臭いらしいですよ？」

**証拠カード　「腐った豆」を渡して下さい。**

靴磨き「見た！数日前から現れて、奇妙なモノを配って、いくつかの質問をしていくらしい。……俺は匂いがダメで近寄らなかったけどさ。覆面の男だったよ」

**証拠カード「黒覆面の男」を渡して下さい。**

他「うーん・・こころあたりはないが・・流行には新聞記者が、裏路地には靴磨きが詳しいよ」

・証拠カード「腐った豆」について

貴族「ああ！それはきっと納豆とかいう料理だな。私も食べたいと思ってたんだ！！誰かに軽く頼んだのだが……だれに言ったっけなぁ……？」

**証拠カード「料理依頼」を渡して下さい。**

マスター「あ、それは多分納豆って料理ですね。東方では一般的な物らしいです。貴族様が言ってましたが」

他「腐った豆……？そんなものが食べれるのか？生憎私は料理しないからなぁ……」

（もしかしたらマスターなら知っているかも？　と誘導して下さい）

・証拠カード「黒覆面の男」について

商人「そういえば……酒場からそんな身なりの男が出てきていたことがなんどかあったな……？マスターの知人だろうか？」

**証拠カード「酒場から出現」を渡して下さい。**

マスター「黒覆面の男……？私のお客様にはいませんね。他の客が怖がりますし」

他　　「うーん……怖いねぇ。なんだってそんなものを付けているのだろうか・・？」

・証拠カード「料理依頼」について

マスター「ああ。はい。前に貴族様がウチで飲まれたときに、食べてみたいなぁ。とおっしゃっていたので。しかし、とはいえ……私もあの匂いには……とてもとても」

他「なんだって、私に貴族様が料理を頼むのさ。そういうのは料理ができる人に頼むだろうよ」

・証拠カード「酒場から出現」について

マスター「え！？……いや、なんでもないんです！！」

　　　　　解りやすく狼狽えていただけると嬉しいです。

他「うーん……そんな変な客がいるのか？まさかなぁ……」

・証拠カード「料理依頼」「酒場から出現」について

マスター「ええ。多分推測どおりにそれは私です。製法を研究中で味見をお願いしてたんですよ。」

**真相カード「覆面のわけ」を渡して下さい。**

他「うーん……マスターに聞いてみるのがいんじゃないか？」

**２－１５「紫の薔薇」**

概要　有名な舞台女優に送り主不明の紫の薔薇が届いた。送り主は同じ孤児院出身の靴磨き。身元を隠したのは、身分違いがスキャンダルにならないようにしていたためだった。

依頼人　有名な舞台女優

私のもとに、デビュー当時から毎回匿名で紫の薔薇を送ってくださるかたがいるのです。心当たりはないのですが、ぜひ直接お礼が言いたいので、探してくださいな。

・初期証拠カード「紫の薔薇の君について」

靴磨き「しがない労働者には関係のない話ですねえ。紫の薔薇？さぁ…」

記者「彼女かい？いやー、人気絶頂の大女優だからね。どんな些細なことでも記事にすればお金になる。スクープでもスキャンダルでも構わない。たとえばデビュー前の話は秘密にされてる。けどココだけの話、実は孤児院出身という噂があるね。でも、この噂だけだと編集長に没にされるかな、うーん…」

**証拠カード「女優の出身」を渡す**

貴族「ああ、ぼくも大好きな女優でね。次の舞台も見に行くつもりさ。紫の薔薇？確かに彼女に似合いそうな気がする。君はどこで売ってるかしってる？そうか、残念」

マスター「ああ、うちのお客さんの話題も、舞台の近い日は彼女のことばかりだ。ありふれた噂ばかりだから、探偵さんのお役にたちそうにないがね。紫の薔薇？そのことならたぶん貴族様が知っているはずだ。彼のもっている庭園には、珍しい花が咲いていたはずだからね。もしかしたらあったかもしれない」

**証拠カード「貴族の庭園」を渡す**

商人「え、探偵さんもあの人の舞台のチケットを？大変申し訳ない、もう完売してしまって…え、違う？紫の薔薇？うちでは取り扱ってないですね。普通の薔薇は赤白黄です。高いお金を出して買うか、品種改良するしかないはず…。そうだ、あそこの靴磨きはいつも、庭仕事の道具を買って行ってるし、聞いてみたらどうですか？」

**証拠カード「庭仕事の道具」を渡す**

学者「私はその女優は名前ぐらいしか知らんし、紫の薔薇についても、育てるのに高度な知識が必要だということしか知らんな」

・証拠カード「貴族の庭園」について

貴族「庭園は管理人が亡くなった時に潰してしまったよ。紫の薔薇もさいていたかもしれないがね。彼が一緒に管理していた孤児院もね。確かあそこの靴磨きは孤児院出身で、庭園の手伝いもしていたんだ。聞いてみるといい」

**証拠カード「靴磨きの過去」を渡してください。**

他「知らないなあ…」

・証拠カード「庭仕事の道具」について

靴磨き　ただの趣味ですよ、たいしたことないです。

・全ての証言カードを持って行く

靴磨き「お察しの通り、私が送り主です。彼女とは同じ孤児院出身で顔なじみだが、今の俺と、しがない靴磨きと知り合いだなんて話が広まっても、スキャンダルにしかならねえ。あいつはもう、俺が気楽に会えるような人じゃないんですよ…すいませんがこれを彼女に渡して下せえ」

**真相カード「紫の薔薇と手紙」を渡してください。**

**２－１６「少年の一目惚れ」**

概要　学者の息子が十日前に街で見かけた少女に恋をした、少女は頭に紫のバラをあしらった髪飾りをつけていたのだがどうにか少女を探して少年と会わしてあげられないだろうか。

依頼主　学者

息子が１０日前に、街で見かけた少女に恋をした。手がかりは青いバラをあしらった髪飾りしかないのだが、どうにかして少女を探し出してほしい。

・初期証拠カード「髪飾り」について

靴磨き「そういえば三日ほど前に君の言うのとよく似た髪飾りを拾ったぞ、見た感じ高そうなものだしお金持ちのものだろうな」

**アイテムカード「高価な落し物」を渡して下さい。**

マスター「その髪飾りならとある服装展示会の後から急に流行りだした気がするな」

**証拠カード「きっかけは服装展示会」を渡して下さい**。

商人「その髪飾りなら五日前からウチで独占的に取り扱っているんだが、売れ行きが好調でありがたいことだよ」

**証拠カード「販売は五日前から」入手**

他「最近町でよく見かけるけど詳しいことはわからないな」（他のNPCに行くよう伝えてください）

・アイテムカード「高価な落し物」について

貴族「これなら五日前娘に買ってやったものだよ、ほらここに娘の名前の刺繍が入っているだろう」

**証拠カード「持ち主は貴族の娘」入手**

他「金の刺繍が入っているしきっと高いものだろう、貴族さんならなにか知っているかもね」

（貴族に行くよう誘導して下さい）

・証拠カード「持ち主は貴族の娘」について

学者「そのリボンを彼女が手にしたのは五日前なのだろ？では十日前に息子が見た少女は貴族さんの娘ではないだろう」

他「貰ったものをすぐになくすなんておっちょこちょいだね」←この証拠カードでは次の手がかりが出ないことを伝えてあげてください、ミスリードです。

・証拠カード「きっかけは服装展示会」について

記者「五日前に開かれた服装展示会に取材しに行ったのだが、会場では服の展示のために人間と見間違うほど精巧な人形がたくさん使われていてびっくりしたよ」

**証拠カード「精巧な人形」を渡してください。**

他「詳しいことは知らないな、新聞に載っていたから記者さんなら知っているんじゃないか」

・証拠カード「販売は五日前から」「精巧な人形」の二枚を出された場合

学者「もしかすると息子の見た少女というのは展示会で使用されていた人形なのかもしれないな」

**真相カード「淡い初恋」を渡して下さい。**

他「それは学者さんに伝えてあげたほうがいいんじゃないか？」

（カードがどちらか一枚の場合）

学者「ちょっとそれでは断定できないな、確信するためにはもっと手がかりがほしいところだ」

　　もう１枚を出すように誘導をお願いします。

**２－１７「盗まれた首飾りを取り戻して」**

概要　家宝の首飾りが盗まれてしまった。盗品を問屋が商人に流したものを貴族が購入した。しかし、調査の中で鑑定書が偽造であることが分かったので、説明して返してもらおう。

依頼人　町人

家宝の首飾りが盗まれてしまった。このままでは、先祖に顔向けができない。首飾りの特徴を教えるから、発見して取り戻してきてほしい。

・初期証拠カード「盗まれた首飾り」に対して

貴族「首飾り・・・？確かに先日上物を購入したが、盗品なんて冗談はやめてくれ！私の名誉にかかわることだし、だいいち鑑定書だってついているんだ！！」

**アイテムカード「首飾りの鑑定書」を渡してください。**

記者「ええ。関係あるかはわかりませんが、盗品のロンダリングが多発していますね」

**証拠カード「問屋がらみの犯罪」を渡してください。**

商人「確かにうちでは、高級な装飾品も扱ってはいるけれど、ちゃんと鑑定書付きの品です。盗品なんて扱っていませんよ」

　　　多少、狼狽えてるというか、焦りをみせつつ毅然とした態度でお願いします。

靴磨き「首飾り・・・？生憎、そんな高級品縁なんかさっぱりでね。

　　　　ああ、でも盗まれた首飾りの売買ルートとかを新聞記者が調べてたっけな・・・？」

　　　　さりげなくのヒントをお願いします。

マスター「首飾りか・・・。うーん、そういえば貴族様が買ったとか、いってたなぁ・・・・」

学者「高級装飾品の盗難とロンダリングが最近、起きているみたいだね。新聞記者が調べていたよ。」

・アイテムカード「首飾りの鑑定書」に対して

商人「……！！いや、鑑定書が付いているじゃないか！！盗品のハズがないだろう！！やめてくれ！！」

　　　あー、こいつ絶対なんか知ってるな、って思わせていただければ幸いです。

学者「おや？これは……確信は持てんが、もしかしたら偽造ではないかな。私の目に間違いがなければだが……」

**証拠カード「もしかして偽造？」を渡してください**

他　「おお、首飾りは見つかったのかい。よかったじゃないか」

・証拠カード「問屋がらみの犯罪」に対して

商人「……！！ならば偽の鑑定書だという証拠を持ってきたまえ！！」

貴族「なんだね？私の首飾りが盗品とでもいいたいのかね？ならば具体的な証拠を出したまえ！！」

他「あぁ、そんな話もあったなぁ。私たちには関係ないだろうけれども。」

・証拠カード「もしかして偽造？」に対して

商人「……！！信用にもかかわるのに、偽の鑑定書なんてつくるわけがないだろう！！

いい加減にしてくれ！！」言い逃れる犯人みたいな感じでお願いします。

貴族「うーん……いや、しかし……商人は本物といってたし、彼が偽物を渡すとは考え難い……」

他「えぇー！！鑑定書は偽造だったのかい？たまげたなぁ。学者様がいうならそうなんだろうけど」

・証拠カード「もしかして偽造？」「問屋がらみの犯罪」に関して

商人「……実は私も、あの鑑定書は偽造だと考えているのですが……信用にかかわるため、言うに言えず……そこまでご存じなら私も腹をくくりますが……」

**証拠カード「鑑定書は偽造」を渡してください。**

貴族「もしかしたら……彼も被害者なのかもしれんな……。商人に話を聞いてくれ。彼が盗品というなら、私も速やかに返却しよう。」

他「ふーむ、装飾品のロンダリングねぇ。大変なんだなぁ……で。私に関係あるのかい？」

・証拠カード「鑑定書は偽造」に対して

貴族「この首飾りは盗品だったのか。それを所持していることは私の名誉にかかわる問題だ！君、これを持ち主に届けてくれ！！よろしく頼んだぞ！」

**真相カード「戻ってきた首飾り」を渡してください。**

**２－１８「行方不明の看板娘」**

概要　消えた看板娘。実は貴族からプロポーズされたのだが……彼女には恋人がいた。これを機に人生をやりなおしたい、と考えた彼女は駆け落ちをしたのだった！！

依頼人　マスター

看板娘のローラが行方不明になってしまった。特徴は綺麗な金髪だ。彼女は貴族様にたいそう気に入られていたようなので、それが関係しているのかもしれない。貴族様が彼女に何かをしたと思いたくはないが……どうか彼女を探してほしい。

・初期証拠カード「酒場のローラ」に対して

商人「うん？一昨日、いろいろと旅道具を買い込んでいたぞ。旅行にでも行くんじゃないか？」

**証拠カード「旅支度」を渡してください。**

靴磨き「昨日、美容院に入っていくのをみたぞ。たしか赤毛に染めていたな……。せっかく綺麗な金髪をしていたのに」

**証拠カード「赤毛のローラ」を渡してください。**

記者「ああ、ローラと言えば、なかなかの器量よしだよ。貴族様からプロポーズを受けたって、もっぱらの噂だよ」

**証拠カード「貴族のプロポーズ？」を渡してください。**

貴族「ローラだって……！！いや、私は何も知らんぞ！！」

学者「うーん・・なじみ深い名前ではあるが・・私は酒場にはいかないからなぁ……」

・証拠カード「貴族のプロポーズ」に対して

貴族「ああ……フラれたよ。付き合ってる彼氏がいるらしくてなぁ……誰かは知らんが。そして彼女はいなくなってるだろ？私としては権力使って云々という気はないのに……残念だ」

他「ああ……ごく最近の話だよ。2日くらい返事を伸ばして、結局貴族様はフラれたらしい。まぁ、貴族様からプロポーズなんてされたら町娘はビビっちまうよなぁ……OKするならともかく、断るとなると、相手は権力者。ちびるね」

・「赤毛のローラ」に対して

記者「ああ……。そういえば関係あるかは知らないが、学者先生の助手のジャックが、

　　　赤毛の女性と馬車に乗ってるのを見たな」

**証拠カード「ジャックと馬車」を渡してください。**

貴族「ええ？あの綺麗な髪を染めてしまったのかい？私は好きだったのに……」

学者「いや、知らないな」

他「赤毛ねえ？そう言えば、記者が赤毛がどうこうという話をしてたような……詳しくは覚えてないが」

・「旅支度」に対して

靴磨き「うーん……関係あるかはわからんが、学者先生のとこのジャックも旅支度をしていたな」

マスター「ええ？ローラが旅支度をしていたって？知らなかった……」

貴族　「……こう思いたくはないが、私が原因なんだろうね……やっぱり」

学者　「ローラ……彼女の旅支度についてどうして私が知ってるのかね？」

新聞記者「ああ……ローラさんから、いくつかの土地について聞かれましね。たしか」

・証拠カード「ジャックと馬車」に対して

学者「ジャックは、先日をもって助手をやめたが……あいにくと彼のプライベートには、私は興味ないのでね」何かを隠している様子でお願いします。

貴族「ジャック……？生憎と私には縁がないが……？」

マスター「ああ……ジャックか。あいつは確かローラの彼氏だったな。前に店までローラを迎えに来たので知ったんだったか」

**証拠カード「ジャックとローラ」を渡してください。**

他「ジャックねえ？ローラと関係があるんだとしたら、学者かマスターのどちらかなら知ってるかもな」

・証拠カード「ジャックとローラ」に対して

学者「ジャックと馬車」と同様に対応してください

貴族「……なるほど……ローラの彼氏はジャックというのか。知ったところで、もう私には関係ないが……」

他「へえ。ローラの彼氏はジャックだったのか。そいつはしらなかった」

・証拠カード「旅支度」「貴族のプロポーズ」「ジャックとローラ」に対して

学者「そこまで調べがついているのか……。なら話そうか。ローラとジャックはこの町を出て行ったよ。くれぐれも貴族様には内緒にしてくれ……」

**真相カード「駆け落ち」を渡してください。**

貴族　「なるほど……私は本当にローラにはすまないことをしたな……学者先生に聞いてくるのがいいだろう……さすがに教えてくれるだろうよ」

他　　「ああ……これは。駆け落ちかな……なんにせよ、学者先生に聞くのがいいだろう」

**３－１「表紙のない本」**

概要　貴族が探してほしいと言った本のシリーズは、揃えずに捨てたり、存在を公表したりすると、死神によって殺されるという呪いの本だった。マスターは半信半疑で、その本を捨てられずにいた。記者と商人は交渉を持ちかけるが、上手くかわさないと事態が衆目に晒されてしまう。結局元は学者が雑な扱いによって紛失したものの一部で、最終巻は既に燃やしたとのこと。

依頼人　貴族

秘密裏に調べて貰いたいことがある。私が所有する1冊の本に関してだ。この本は第二巻らしく、この本のシリーズを探してほしい。残念ながら表紙がはがれ落ちていて、タイトルは全く見当もつかない。ただ、私がこのことに関わっていることは、なるべく大っぴらにしてしないでもらいたい。

★証拠リスト（これをみながら次ページ以降の台詞表を読まないと、内容が分かりません）

①初期「表紙のない本」

②学者「非科学的な内容」

③商人「本の注文」

④記者「本、譲ります？」

⑤靴磨き「二人目の本探し」

⑥靴磨き「路地裏の取引」

⑦マスター「一組の呪いの書」

⑧商人「流通しない本」

⑨記者「三冊一組の本」

⑩貴族「依頼人の心配」

⑪記者「号外新聞・三冊一組の本」

⑫学者「号外・処分した呪いの本」

⑬学者「処分した呪いの本」

NPC毎の証拠対応表（NPCマニュアルとしての措置）

**・貴族**

①「くれぐれも私の仕業と悟られないよう頼むよ」

②「内容についてか？　いや、それは私の口からは言うことはできんのだ……」

③or⑪「なんだと！？うわさになったらどうするんだ！　ああもう私はおしまいだ！死神に殺されてしまう、出来るだけ早くこの街から引っ越さなければ！！！」

**→真相失敗カード「死神」**

④「知らなかったな。それがこの本に関係しているのかは分からないが」

⑤「何、一人見つかったのか!?　あっ、いや……大丈夫か、ふう（挙動不審に空を見たりする？）」

⑥「初耳だな、それがその本に関係しているのかは分からないが」

⑦「マスターもその本を持っていたのか！　しかし、彼も続刊の持ち主を知らないのか……、ああ、あまりことが大きくなると、私は本当に殺されてしまうかも……」

**→証拠カード⑩「貴族の心配」**

⑧「なるほど、だが持ち主を探さないことには……」

⑫「新聞の号外を見たか！？　あんなことをしては、死神に殺されてしまうに決まっている！　出来るだけ早くこの街から引っ越さなければ！！！」

**→真相失敗カード「死神」**

⑬「そうか、学者が既に本を処分していて、健在だと。なんだ、取り越し苦労だったのか……肩の力が抜けた気分だよ。ありがとう」

**→真相カード「取り越し苦労」**

**・商人**

①「古本探しなら手伝ってもいいけれど、肝心の題名が分からないのでは、難しいかもしれませんね。それと探し主のお名前は何でしょうか？こういうのは依頼人がどこの誰なのかはっきりわかっていた方が、手伝いも増えて探すのが楽でして」

名前を出さない→「そうですか？（訝しむ様子）」

貴族の名前を出す→「では、これを続刊の注文書としておきます。まあ、特別な本でなければじきに見つかるでしょう。貴族様のところへ報告へ行ってくださいな」

**→証拠カード③「本の注文」**

プレイヤーの名前で探してくれと頼まれる**→⑧「流通しない本」**

②「まあ占いの本とかも、あの学者先生は非科学的だってばっさり言っちゃう人だしねえ」

③（貴族のところへ誘導）

④「ああ、古本でも特別な事情があって売れないとか、故人の希望だとかで、売りに出されない本も沢山あるらしいですね」

⑦「一組の呪いの書」を①と同時に出し、マスターが注文者であることを告げるなどして交渉回避

「あれ、そうですか。"まじない"の本ですね。まあいいですよ、じゃあ普通に探しますから」→「やっぱりうちには知ってる人がいないみたいですねえ。誰かが既に持ってるんじゃないですか？」

**→⑧「流通しない本」**

⑤⑥、⑧～「本の内容については分からないですね」

**・マスター**

1. 「あ、この本は……！いや、なんでもないよ」
2. 「やはり学者先生はそういうのか、だがなあ……いや、何でもない」

③（貴族のところへ誘導）

④「初耳だな」

⑤「ああ、そうだ。もしかして君たちもこの本について探しているのか？　これは死神の書といって、雑に扱ったり大っぴらにしたりすると、死神に殺される呪いの本の第一巻らしいんだ。最終巻までセットにして同時に焼けばいいらしいんだけど、私には他に何冊あるかも分からなくて、困っていたんだよ。私もオカルトを信じきっているわけではないけど、少し怖くて処分できずにいたんだ」

**→⑦「一組の呪いの書」**

⑥「学者さんがねえ、私は何もしらないよ」

⑧「そうか……でも言い伝えを信じている人なら、絶対に持ちっぱなしにしてしまうと思うんだがな」

⑨「なるほど、ではあと一冊ということになるな」

⑩「私も心配だよ」

⑪⑫「号外なんて出して、大丈夫なのだろうか？　特に貴族様の精神状況が心配だ」

⑬「そうか、安心したよ。貴族様にもそれを伝えてきたらどうだい」

**・学者**

1. ふむ、中を見ても良いかな？」（はい／いいえ）　いいえだと何も分からず

「これは……いや、よく分からなかったよ。ただ、非科学的で、真っ当な内容の本では無いようだね」

**→②「非科学的な内容」**

（③貴族のところへ誘導）

④⑧⑨などが単体で出てきた場合「何が知りたいんだ？何も教えられることはないと思うが」

⑤「二人目の本探し」「そ、そうか……」

⑥「路地裏の取引」「君に教えて私が得をするわけでもないだろう」

⑩「君の依頼人の心配が、わたしになんの関係があるんだ？」

⑥（取引）⑦（呪いの書である）⑧（流通しない）（⑩貴族は信じている）＋⑨（三冊一組で、あと一冊）

（貴族は錯乱しており、マスターも心配している。だが、呪いの本は見つからない。もしあなたが過去に路地裏で呪いの本を受け取っていたなら、正直に話してほしいなどと説得）

「なるほど、マスターと貴族様が困っているのか……それなら、正直に話すとしよう。私は友人から、それらの本を無理矢理に押し付けられたんだ。私は呪いや死神などは全く信じていなかったから、雑に扱っていたら二冊を失くしてしまってね。この後しまったと気付いたよ。私がオカルトな本を広めただなどというイメージを付けて欲しくなかったから、黙っていたんだがね。」

「残りの一冊かい？　既に灰になっているよ。それでも私は生きているんだから、やはり呪いや死神なんてものは眉唾だね」

**→⑬「処分した呪いの本」**

（⑨の代わりに⑪を持ってきた場合、分岐する）**→⑫「号外・処分した呪いの本」**

**・記者**

①「本探しですか……。そういえば少し前に、匿名で題名のない本譲りますって広告を入れてくれという話がうちのところにもありましたねえ。怪しすぎて、結局立ち消えになってしまいましたが」

**→④「本、譲ります？」**

②「へえ、まあ学者さんは市民向けの占いの本すら非科学的で不愉快だという人ですから」

1. 貴族のところへ誘導）

⑤「二人目の本探し」⑦「一組の呪いの書」などを見せる

「おっ、面白そうな話題ですね！　私も最近、呪いの本について調べていまして。持ち主は分からずじまいでしたが、ちょっと良い情報が手に入りました。そこで、この情報を教えるかわりに、この一連の出来事を実名入りの記事にしたいんですが。だめですかね？　他の持ち主も名乗り出てくれれば、効率的だと思うのですが」→はい「じゃあこれをどうぞ！」

**→⑪「号外新聞・三冊一組の本」**

→（⑩を援用しても良い）依頼人が殺される、心配しているなどと伝える

「そうですか……流石に私もペンで人を殺そうとは思いませんし、あなたに免じて、今回はただで情報を教えてあげます」

「呪いの本は、三冊で１セットのようですよ」

**→⑨「三冊一組の本」**

⑥「なかなか怪しいですが、私は知りませんねえ」

⑧「へえ、そうなんですか」

⑩「何かあったんですか？」（もし呪いの書の話が出てきたら、そのままただで情報を渡すルートへ）

**・靴磨き**

①「本探しか。そういやマスターが俺のところに、表紙の無い本について何か知らないかと相談しに来てたな。俺に聞かれても興味ないし、そういうことなら学者に聞きにいけばいいものの」

**→⑤「二人目の本探し」**

②「俺にとっちゃあ科学も良く分からないんだけどな」

（③貴族のところへ誘導）

④「そういや、ちょっと前に学者が誰かから路地裏でこそこそと袋を受け取るのを見たな。学者はそれほどでもなかったが、その誰かさんはとても動揺していたようだったな」

**→⑥路地裏の取引**

⑦～「はあ。俺には関係ない話だな」

**３－２「読めない手紙」**

依頼人　あなたの友人

君の下に送られてきた１枚の手紙、中身は雨に濡れて読めなくなっていた。差出人は先日事故死した友人。彼は、君に何を伝えようとしたのか。

・初期証拠カード「友人について」

記者「そいつの事故なら記憶にあるぜ。馬車の前にふらふらっと出てきて轢かれたやつだな。御者によると、三日前は新月の日で暗かったし、気付いた時は間に合わなかったそうだ。そいつは泥酔していたそうだし、これだけなら特に珍しい事ではないが、何かネタでもあるんですかい？」

**→証拠カード「新月」**

商人「あの人ですか、私はあまり親しくないのですが……ああでも、この前何かお金が入り用だったらしくて、私の所に借金のお願いをしに来たよ。残念だがお金は信用の問題だからな。貸してはやれんかった。何時だったかな。たしか三週間も前の話だ」

**→証拠カード「金の無心」**

マスター「あの人ですか…、最後にお会いしたのは…、そうそうお客様として一人で飲みに来られてましたね。酔いつぶれるてしまわれて、看板の時間になってもなかなか起きなくて苦労しました。あれはたしか、十日前のことです。彼、何か寝言で、こんなはずではなかった、こうなったからには探偵に頼んででも証拠を掴んでやる、と呟いてましたが何かあったのですかね？」

**→証拠カード「予定外の出来事」**

靴磨き「あの旦那でしたら、お会いしましたよ。何か上機嫌で、尋ねてみたら儲け話ができたとか言ってましたね。あの日は旦那の金払いも良かったので覚えてますよ。一ヶ月くらい前ですかね」

**→証拠カード「友人の儲け話」**

貴族「ああ、彼かね。彼の会社には私の公領の取引を一部任せていたのだが、突然の死亡だったからね。いろいろ大変だったよ。最後に会ったのは、たしか二週間くらい前か。私の公領で新しい鉱山の開発予定があってね。その開発権を入札したのだよ。残念ながら入札は○☓商事が取ってしまったので、彼は落ちてしまったけどね。なにかずいぶんと無理してお金を集めてきたようだが、ルールはルールだからね。実際彼と○☓商事の示した金額は僅差だったしね、まさかそれを苦にして自殺、ということも彼なら無いと思うのだが」

**→証拠カード「鉱山の開発権入札」**

ここより先の情報については、特に書いてなければ友人関係以外は商人は「私にはわかりませんな。他の人をあたってください」ととぼける。

・証拠カード「鉱山の開発権入札」に対して

記者「あの入札には疑問があってね。普通入札の金額はある程度散るものなのだが、入札した会社と落とした会社が僅差だったそうだ。○☓商事には黒い噂が絶えなくてね。競争相手を恐喝したとか。その一方で偉いさんには受けが良い。確実な業績を上げ続けているからな。ひょっとしたら何処かから情報が漏れていたのかもな。」

**→証拠カード「入札情報がばらされた？」**

マスター「そこの会社はあそこの商人の従兄弟が経営している会社だよ。まあ名前が違うからわかりにくいとは思うし、古くからこの街にいる者以外は知らないだろうけどね。」

**→証拠カード「商人の従兄弟」**

靴磨き「最近あの会社は手広く金儲けに走っているな。守銭奴っていうのはあそこの社長みたいなのを言うんだろうな。そう言えばこの前○☓商事が臨時休業したな。なんかあったのかもな。たしか、新月の日だったな。」

**→証拠カード「臨時休業」**

他「○☓商事ねえ……古い会社だから、マスターや記者なら詳しいかもな」

・証拠カード「商人の従兄弟」に対して

学者「商人ならここ最近えらくご機嫌だな。おそらく儲け話が上手く行ったんだろう。しかし鉱山の開発計画では、彼は君の友人に融資したんだと聞いていたから……ああ、入札権を得た○☓商事は彼の従兄弟の会社だったのか。従兄弟が設けたから彼は喜んでたんだな」

**→証拠カード「商人の融資」**

・証拠カード「臨時休業」に対して

マスター「ああ、その日ですか？そう言えば、商人が珍しく酒を買いに来ましてね。彼はあまり酒を飲まないのですが、なんでも酒好きのお客様と飲むからアルコール度数の高いのを適当に売ってくれって。お客様の好みはと聞いたのですが何でも良いと言われまして、酒好きにしては変わっているなと思ったのですよ」

**→証拠カード「酒の購入」**

他「その日か……多分関係のない話だが、あの日はマスターの店に行ったらやたら酒の在庫が少なくなっててね。俺の欲しい酒もなくて困ったよ。何かあったのかな？」

・最低限の証拠カード「金の無心」「商人の融資」＋「臨時休業」「新月」「酒の購入」（事故前の行動）

これに加えてその他証拠より、商人が従兄弟の会社に、”友人に金を貸した”という情報を流し、友人を負けさせた後口封じに事故死させたのでは？と推理して商人に詰め寄る。裏切られる前後の友人の動向は、証拠より裏付けることができる。（「予定外の出来事」「友人の儲け話」）何より、商人は「金の無心」で嘘を付いている。これを突ければ大きい（ただ、絶対に必要とは限らない）

→推理を認める

商人「その通りです。ふとしたはずみで従兄弟に、鉱山入札についての話を振ってしまったのが不味かった。会社から脅されて、情報提供してしまったんだ。しかもあなたの友人はそれに気付いたんでしょうな。連絡を受けた私が従兄弟の会社に行った時には、彼はもう……私も鉱山の入札の件は知られたくなかったので黙っていましたが、もはやかばうのも限界です」

**→真相カード「商人の独白」**

商人の言い訳集

・商人の従兄弟や臨時休業に対して

「まあ、そんな従兄弟もいますが……それが何か？」

・酒の購入に対して

「お客さんが欲しいといえば、私がどうだろうと買いに行くのが普通でしょう」

・融資

「私が誰に何を融資しようと、私の自由では？」

**３－３「謎の襲撃者」**

依頼人　マーティン・ウォーカー公爵

2月11日17時に、私の息子で、実業家でもあるダグラス・ウォーカーが自室で意識不明になっているのが発見された。灰皿で頭を殴られたのが原因で、推定時刻は16時以降。部屋の様子から、息子は自ら犯人を迎え入れたようだ。息子のメモによると、11日は14時に貴族氏と会う予定があったらしい。発見者は近所の医者で、直前に息子が倒れていると匿名の電話を受けたとのこと。雑音が酷く、相手の年齢や性別はわからなかったらしいが、酷く動揺しているようだったという。

1.初期証拠カード「ダグラスの意識不明」

2.初期アイテムカード「灰皿」

3.証拠カード「急用」

4. 証拠カード「貴族の目撃情報」

5. 証拠カード「喧嘩中の妻」　全く伸びはしないが、それなりに重要な証言が出る。

6. 証拠カード「一緒に酒」

7. 証拠カード「借金」

8. 証拠カード「靴磨きの自白」

9. 証拠カード「灰皿の指紋」

10. アイテムカード「調査済みの灰皿」

11. 証拠カード「貴族の告白」

12.アイテムカード「浮気相手の写真」

13.証拠カード「学者の妻」

14.証拠カード「灰皿に学者の指紋」

15.証拠カード「拭き取られた跡」

16.真相カード「学者の自白」

17.証拠カード「ダグラスの家に学者の指紋」

**貴族**

1：「彼とは大学の同期で、同窓会についての話をする予定だったんだ。しかし当日の朝になって、急用が入ったから延期にしてくれと電話で言われてね。おかげで丸々一日暇になってしまったので、昼からは靴磨きを誘って自宅で酒を飲んでたよ」

**3番「急用」を渡して下さい。**

2：「学者に頼んだらどうかね？私の知り合いで、そういうことを調べられるのは学者とあと一人しか知らないよ。あと一人の方はちょっと喧嘩中なので、余程の理由がない限りは勘弁してほしいね」

4：「勘違いだろう。私はその時間家にいたし、今付き合っている女性などいないよ」

5：「確かにそんな噂はあるな。ダグラスは確かに浮気くらいやりかねん男だが……。奥さんに限ってはそんなことはないだろうよ」

6：「ああ、その通りだよ。それが何か？」

**3番をまだ渡してなければ、渡して下さい。**

7：「それは事実だが、だから何だというのだね？」

8：「吐いてしまったか。まあ仕方ないな。こうなった以上は素直に話そう。その日私はダグラスの奥さんと合っていて、それを知られたくなかったのだ。私は以前からダグラスの浮気について相談を受けていて、それで度々奥さんと会っていたのだ。これがダグラスの浮気相手の写真だ。なにかの役に立つかもしれないので君に渡そう。それと、私と彼女は犯行のあったと思われる時間帯はずっと郊外のレストランにいたから、完全に白だよ」

**11番「貴族の告白」と12番「浮気相手の写真」を渡して下さい**。

貴族は奥さんとの関係が浮気だとは積極的には言いませんが、浮気です。それは浮気じゃないのか？と突っ込まれたら、渋々認めましょう。

なぜ靴磨きはお前が犯人じゃないと知っていた？と聞かれたら「レストランを出たところで、靴磨きに出くわしてね……」

9：「ふむ。犯人は手袋でもしていたのかな？」

10：「これがどうかしたのか？」

13と2：「学者も容疑者となると、学者に調べてもらうという訳にはいかないか……。他の知り合いに頼んでみよう。そいつは警察関係者だから信用していいはずだ。調べてもらうかね？」

肯定されたら「では調べてもらおう……（間）……調べて貰った結果、灰皿から学者の指紋が出たそうだ……」

**14番「灰皿に学者の指紋」を渡して下さい。**

否定されたら「そうか、まあ調べたくなったらいつでも声をかけてくれ」

13と10：「学者が容疑者になったから、調べ直したいというわけか……いいだろう。他の知り合いに頼んでみようか？」

否定されたら「そうか、残念だ」

肯定されたら「では調べてもらおう……（間）……灰皿からダグラス以外の指紋は出なかったが、かなり広い範囲で指紋が拭き取られていたらしい。これは事件直後に犯人が拭きとったか、学者が拭きとったかのどちらかだろう。しかし、これで手詰まりなのか？いや、何か見落としているような気もする……その何かがわかれば、まだ手はあるかもしれない。他の人達に聞けば、なにか知恵を出してくれるだろう」

**15番「拭き取られた跡」を渡して下さい。**

ここから先に進むには、何か推理が必要なんだということを教えてください。

「拭き取られた跡」を渡した後で、灰皿以外にもダグラスの家には指紋があるんじゃないの？と突っ込まれた場合は、

「おお、そうだな。よし、調べてみよう……（間）……うむ。やはりドアノブや電話機から、学者の指紋が見つかったらしい。彼はダグラスと面識はないと言っていたそうじゃないか。これは明らかにおかしいな」

**17番「ダグラスの家に学者の指紋」を渡して下さい。**

学者は慌てて逃げたので、家の中の指紋はそのままなのだ。

**学者**

1or2：「そ、そそそんなことがあったのか！し、知らなかったなあ！（必至で落ち着こうとする）……私は被害者とは面識がないから、特に役に立つようなことは知らないよ。ところで、その灰皿はもう調査したのかね？もしまだなら、少し預からせてくれれば、私の方で調査して上げよう」

承諾した場合、「調べた結果だが、灰皿には被害者の指紋以外は付着していなかったようだ」

**9番「灰皿の指紋」を渡す。また、2番のカードを10番「調査済みの灰皿」に取り替える。**

承諾したけど、変なことをしないか目を光らせていると言われた場合、

**9番「灰皿の指紋」だけを渡す。**

拒否した場合「そ、そうか。残念だ。その気になったらいつでも頼みに来てくれたまえ」

3：「何も知らないな」

4：「何も知らないな」

5：「そ、そんな噂があるのかね？い、いや、私は何も知らないよ」

6：「何も知らないな」

3、4、6「それはおかしいな。しかし私としては一応容疑者の貴族様はともかく、他の二人が嘘をつく理由があるとは思えないな。一番付き合いの長いマスターなら心当たりがあるかもしれない」

7：「靴磨きに問いただせば？」

8：「貴族に聞け」

11：「そういうことだったのか？」

12：「こ、これは……！！まさか……！！いや、なんでもない、忘れてくれ……」

13：「うむ、別居中の妻に瓜二つなのは事実だ……。だが、本人に確認はしていない内は、断言するわけにはいかないな」

今まで知らなかったのかと聞かれたら「し、知らなかったとも！」

15：「そ、それは多分、犯人が犯行直後に拭きとったんだろう……」

なぜ調べた時に言わなかったと聞かれたら「い、言い忘れていたかね……。確か言ったような気がするんだが……、何にせよ、わ、私は犯人じゃない」

14or17：「こうなっては言い逃れもできないな……。私はしばらく前にダグラスと妻が浮気しているのを知って、あの日は彼に妻と別れるように直談判しに行ったんだ……別居中とはいえ、私は妻をいまでも愛していたんだから。しかし結局は口論になり、ついカッとなってしまって……」

**真相カード、16番「学者の自白」を渡して下さい。**

**記者**

1：「その日は15時頃でしたかね？貴族氏が街を歩いているのを見ましたよ。それも綺麗な女性と一緒に。その女性、どこか見覚えがあったんですが、思い出せなくて……カメラが故障してなければ写真の一枚でも取ったんでしょうけど」

**4番「貴族の目撃情報」を渡して下さい。**

2：「調べて欲しければ学者さんのところに行ったら？」

3or6：「それは変ですよ。だって私はその時間に貴族様が外にいるのを見てるんだし。彼らは嘘をついてるんじゃありませんか？」

まだ渡してなければ4番を渡してセリフを言う。

5：「もともと被害者はあまり素行がいい男ではありませんからね。そういう噂は常にあります。奥さんはそこまで評判は悪くはありませんが、そういう夫に愛想をつかして、他の男に走ったなんて噂もありますね」

7：「靴磨きを問い正せ」

8：「なるほど、そういうことでしたか。ともかく貴族様に話を聞くべきですね」

9：「犯人は手袋でもしてたんでしょうかね？」

10：「それが何か？」

11：「なるほど、そういうことですか。その写真ってのを見せてくれませんか？」

12：「これは知っている人のような気がしますが……やはりマスターに聞いてください。私の思った通りの人なら、マスターが一番詳しいでしょう」

誰なんだよ！と突っ込んで聞かれたら「確信が持てないんですよ。間違いだったら責任もてません」

13：「なるほど……学者さんもお気の毒に」

13と2or13と10：「となると、学者さん以外のところで調べてもらったほうがいいですね。貴族様にはそういう知り合いがいた気がします」

14or17：「学者に行け」

15：「こういう時に重要なのは想像力だと言われたことがあります。犯人は被害者を殴り倒したあと、どういう行動を取ったんでしょう？」

灰皿以外にもダグラスの家には指紋があるんじゃないの？と突っ込まれた場合は、貴族に誘導して下さい。

**靴磨き**

1：「貴族氏ですか？その日はあの人の家で昼から一緒に酒を飲んでましたよ。急なことでしたが、奢るって言ってくれたんでね」

**6番「一緒に酒」を渡して下さい。**

3：「はい、貴族様の言う通りです」

**6番をまだ渡してなければ、6番を渡して下さい。**

4：「そいつは勘違いでしょうよ」

5：「そんな話を小耳に挟んだことはありますな。詳しくは知りませんが」

7：「マスターにはお見通しだってってことか……嘘は付けないねえ。はい、貴族様に口裏を合わせるよう頼まれたのは事実です。でも、貴族様は犯人じゃありませんよ。流石にそれならかばったりしません。詳しくは貴族様に聞いてください。俺が吐いた以上は正直に話してくれるはずです」

**8番：「靴磨きの自白」を渡して下さい。**

なんで貴族が犯人じゃないって知ってたんだ？と後で聞かれたら「いやね、レストランから出てきた貴族様とたまたまばっちり出くわしまして……」

9：「犯人は手袋でもしてたのかな？」

10：「で、それがどうしたんで？」

11：「まあそういうことです。ところで写真は？俺もまだ見せてもらってなかったんで」

なんで知ってたんだ？と聞かれたら「いやね、あの日バッタリお二人に出くわしましてな」

12：「見覚えがあるようなないような……マスターなら知ってるかもしれないな」

13：「あれまあ……お気の毒に」

13と2or13と10：「となると、学者先生以外のところで調べてもらったほうがいいですね。貴族様にはそういう知り合いがいた気がします」

14or17：「学者に行け」

15：「犯人は酷く慌てていたって話じゃないですか。その時に指紋を拭き取る冷静さが残ってたんでしょうか？」

灰皿以外にもダグラスの家には指紋があるんじゃないの？と突っ込まれた場合は、貴族に誘導して下さい。

**マスター**

1：「ダグラスねえ。仕事に関しちゃ有能で公正だって評判だが、私生活に関しちゃ女好きでだらしないとか、あまりいい話を聞かないね」

2：「学者に行け」

3や6：「靴磨きとねえ……いや、なんでもない。忘れてくれ」

4：「最近頻繁に来なくなったから、女でもできたのかと思ってたが、当たりみたいだな」

5：「そういえばそんな噂は聞いたことがあるな。ちなみに奥さんはダグラスの同窓で、つまり貴族とも同窓だって話だぜ」

3、4、6：「実は靴磨きは貴族様に借金をしててな。それで頭が上がらんのだよ。本人は隠したがってるみたいだったから、今までは黙ってたんだがねえ」

**7番「借金」を渡して下さい。**

8：「貴族に行け」

9：「犯人は手袋でもしてたのかねえ？」

10：「これが何か？」

11：「そういうことか。で、写真は見せてくれないのかい？」

12：「これは学者先生の奥さんだ。数年前から別居中で、直に何度も会ったことがあるのは俺くらいだろうから、他の連中は知らないかもしれんな。そう言えばこの前学者がこの店に来た時、珍しく酔いつぶれて奥さんの名前を言い続けてたんだが、もしかするとあいつはこれを知ってたのかもしれないな。そうなると、学者も容疑者入りってことかねえ？」

**13番「学者の妻」を渡して下さい。**

13と2or13と10：「となると、学者以外のところで調べてもらったほうがいいだろうな。貴族様にはそういう知り合いがいた気がする」

14or17：「学者に行け」

15：「学者があなたに調査を依頼された時に拭きとったんだと仮定すると、それまでは指紋が残っていたわけだよな」

灰皿以外にもダグラスの家には指紋があるんじゃないの？と突っ込まれた場合は、貴族に誘導して下さい。

**商人**

1：「ダグラスか。直接の面識はないが、仕事柄多少は情報も入ってくる。彼は今奥さんと喧嘩して別居中でね。原因については、ダグラスが浮気したんだとか、いやいや浮気したのは奥さんだとか色々言われちゃいるがよくはわかってない。依頼人が警察ではなくあなたに依頼を持ち込んだのはこのあたりが理由かもしれないね」

**5番「喧嘩中の妻」を渡して下さい。**

2：「学者に行け」

3：「何も知らない」

4：「何も知らない」

6：「何も知らない」

3、4、6「それはおかしいな。しかし私としては一応容疑者の貴族様はともかく、他の二人が嘘をつく理由があるとは思えないな。一番付き合いの長いマスターなら心当たりがあるかもしれない」

7：「靴磨きに行け」

8：「貴族に行け」

9：「犯人は手袋でもしてたのかな？」

10：「これが何か？」

11：「ほお、そういうことですか、ところで、写真を見せてくませんか？」

12：「見覚えがあるようなないような……マスターなら知ってるかも」

13：「そうだったのか。学者先生もお気の毒に」

13と2or13と10：「となると、学者先生以外のところで調べてもらったほうがいいですね。　　　　　　　　　　　　貴族様にはそういう知り合いがいた気がします」

15：「灰皿にばかり目を向けるべきではないかもしれないな」

灰皿以外にもダグラスの家には指紋があるんじゃないの？と突っ込まれた場合は、貴族に誘導して下さい。